

中学・高校生の食生活と家庭科教育

龍野川サ高 ○浅賀容子 淑徳学園 石井真理 大妻中野サ高 小瀬川継
 美 文京学園 吉原ひろ子 東京農大 加藤みゆき 大妻サ大 岡本順子
 大森正司

目的 家庭内暴力、学校内暴力が社会問題化してしまった。昨今、家庭におけるよりも、学校におけるよりもの機能を十分に果し得てないのが現状である。特に家庭科は今日の受験制度の中では主要科目ではないため、やゝもすると軽視されがちな傾向にあるが、今はその生徒の生活に密着した家庭科教育が求められ、又より魅力ある生活、より魅力ある生きがいを創造するための家庭科教育が望まれているものと考えられる。この様々な点に鑑み、家庭科教育を受ける前後、生徒を対象にアンケート調査を行い、主として食生活の面において家庭科教育の効果について検討し、若干の知見が得られたので報告する。

方法 都内の私立中・高等学校8校を任意に選定し、入学時の生徒は家庭科教育未経験者、食分野の家庭科を終了した生徒は経験者として、約1000人に対して、アンケート調査を行った。また平日の中、3日間にわたり朝食に関して実態調査を行った。これを外国文献社製パスキーで処理、解析した。

結果 1) 食(収穫、献立)の選択、消費、安全性に対する認識などにおいて、家庭科教育の効果が認められた。

2) 毎日の食生活、特に朝食の摂取の仕方にありては欠食者が予想よりも多く、食物摂取の内容についても全体的に努力の傾向が認められた。しかししながら実際に朝食に食べてしまふものと食べたいものとの間にはかなりの隔たりがあった。